

<研究ノート>

Web版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」および 聞き比べによるアクセント弁別能力測定ツールの開発

河津 基

1 はじめに

日本語（東京語）の韻律を特徴づける要因の1つに語アクセントがある。これは音声言語としての日本語らしさを構成する重要な要因である。日本語のアクセントは語の意味的な弁別機能やアクセント句による文構造の表示などの機能を持ち、音声言語でのコミュニケーションに大きな役割を果たしているため、日本語でのコミュニケーション能力習得を希望する学習者にアクセントの教育を行うべきことは当然のことである（鮎澤 1998）。ところが日本語教育の現場では、実際に授業でアクセントを取り上げる日本語教師はわずかである。アクセントの記述は小中学校などの学校教育で行われておらず、このため日本語教師であっても教科書の新出語をアクセント記号に従って読み上げられない者が多いのが現実である。

東京語のアクセントの音響的特徴はアクセント核のある拍の次の拍に急なピッチの下がり目があることであり（杉藤 1972）、アクセントの聞き取りができるということは急なピッチの下がり目の位置が分かる、または急なピッチの下がり目がないことが分かるということである。東京語母語話者およびほとんどの日本語母語話者は発話中のピッチ変動を無意識に聞き慣れており、ピッチ下降についても意識せず聞き分け、言い分けることができる。すなわち、「雨」と「飴」や「打った」と「売った」のアクセントの違いについて、標準的なアクセントがどのようなものであるかの知識はなくとも、口頭で再現し話題にすることができる。

一方、日本語学習者は日本語に語アクセントがあり、意味の弁別にも関わるという事実を教えられなければ、その存在や重要性について知ることができない。このため日本語学習者はアクセントが急なピッチの下がり目の有無や位置により決まることを学び、練習する必要がある。音の高低に関する敏感さは、母語とする言語別にある程度の特徴が見られる。平成前半に行われた大規模な調査により、この特徴がある程度分かってきた。

長年進められてきた日本語韻律に関する研究の出発点とも言える研究に、1989年度から1992年度に行われた重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」（略称：日本語音声）と、1994年から1999年度に行われた創成的基礎研究費

「国際社会における日本語についての総合的研究」（略称：新プロ「日本語」）がある。後者のうち「音声言語の韻律特徴に関する実験的研究」の研究課題の一つである「外国人日本語学習者による日本語アクセントの習得研究」で、世界の日本語学習者を対象に「東京語アクセントの聞き取りテスト」が実施された。これらの研究により学習者の母語別に得意・不得意なアクセント型が明らかになった（鮎澤・小高 1998、鮎澤 1998、鮎澤ほか 2000）。また学習者の母語の韻律パターンに似たピッチパターンはよく聞き取れる「知覚の転移」が見られること（西沼 1997）、練習を重ねることでアクセントへの意識化が進み聞き取り能力が東京方言話者のレベルまで向上したことなどが報告された（鮎澤ほか 1999、鮎澤ほか 2000、鮎澤ほか 2003）。

これらの調査に使われた「東京語アクセントの聞き取りテスト」には、「西沼テスト」（Nishinuma 1994、鮎澤 1997）、「鰻テスト」（河津ほか 1999）、「鯛テスト」（河津ほか 2003、鮎澤ほか 2003）の3つのバージョンがある。2002年に作成された「鯛テスト」は72問からなるテストが8セットあり、年4回実施した場合でも2年間使える。テスト実施後は教員が回答用紙を集め、回答をExcel上の集計表に入力することで、正誤表示及び72問の拍数別アクセント型別の正答率をグラフで表したフィードバックシートが得られる。一方、利用している教員からは、回答の入力作業に手間がかかるためテストの有用性を理解していても他の教員に勧めづらいとの声や、回答用紙の配布から回収までに15分の授業時間を取られるため、これをもう少し短縮したいという声も届いていた。

筆者は留学生による日本語アクセントの聞き取り能力の向上を目的に、Webページとして動作する日本語アクセント聞き取り練習プログラムNALA-Jを開発し2009年にインターネット上に公開した（河津 2012）。次に日本語教師などの日本語母語話者がアクセント記号について理解を深めることを目的として、内容を充実させるとともにプログラムを大幅に改修し、スマートフォンで動作する日本語アクセント練習ツールとして2021年に公開した（河津 2021）。今回、このプログラムを改修することによりWeb版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」を開発した。回答の入力作業を大幅に簡素化できたほか、紙を使ったテストで生じていたいくつかの課題も解決できたので報告する。

前述のアクセント聞き取り能力を測定する調査には問題点があった。どの調査においても、被験者はスピーカーから流れる録音音声聞き、急なピッチの下がり目の位置があったと思われる箇所に「かぎ印」をつけて回答する。ところが言葉を聞いてアクセントを記憶し再生できる話者であっても、急なピッチの下がり目の位置を紙の上で特定する能力を持たない場合が多く、これは学習者にも日本語母語話者にも共通の問題であった。たとえば鮎澤・小高（1998）の実験において統制群として用いられた日本語母語話者の正答率を見ると、東京式アクセント地域の大学生は上位群がほぼ100%であるが、下位群は7割だと報告されている。下位群とは言え母語話者の正答率が7割というテストは、学習者の傾向を把握する上でその正確さに疑

問が生じる。

そこで今回、Web版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」を改造して、アクセントに関する予備知識なしで答えられるアクセント弁別能力測定ツールを制作した。出題音声と選択肢となる音声を聞き比べて同じアクセント型で発音された音声を選ぶため、アクセントを聞き分けることさえできれば正解できる。これを使い仙台の大学に通う学生を対象に聴取実験を実施した結果を報告し、発生した課題および今後の調査の見通しについて検討する。

2 Web版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」

2.1 出題と回答

今回 Web 版を作成したのは、筆者らが 2002 年に開発した 3 代目の「東京語アクセントの聞き取りテスト」で、「鰯テスト」と呼ばれる最新バージョンである。OS やブラウザを問わずコンピューターでもスマートフォンでも動作するが、操作の間違いやデータ回収時の失敗を防ぐため、コンピューターまたはタブレット端末の利用が望ましい。図 1 に開始画面を示す。ここでは回答記録を回収する際に必要となる学籍番号や氏名の情報を受験者が入力する。

図 2 に出題画面を示す。受験者はボタン「聞く」を押して出題音声を聞き、正しいと思われるアクセント型を選択肢ボタン「0 型」「1 型」「2 型」などから選択する。選択肢ボタンを押すと、ボタンの色が青色に変わるとともに、アクセント記号が表示される（図 3）。アクセント記号は『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（NHK 放送文化研究所 2016）に採用された赤色の「\」を使った方式（以下、NHK 式と呼ぶ）で表示される。従来の「かぎ印」を使った表示の利用も設定可能である。選択肢ボタンは何度でも押し直すことができ、その度に対応するアクセント記号が表示される。選択肢ボタンのどれかを押すと、ボタン「決定」が押せる

☰ 日本語アクセント聞き取り練習 NALA-J

鰯1 72問

音声を聞き、アクセント型を選択肢「1型」「2型」「0型」などから選びましょう。

名前:

図1 開始画面



図2 出題画面



図3 選択画面

ようになる。受験者は自分の選択した回答が正しいと判断した際にボタン「決定」を押す。すると回答が記録され、自動的に次の問題画面に移行する。

2.2 回答データの回収

テストが終了すると、テスト開始時に入力した氏名、開始時刻と終了時刻、そしてすべての問題に対する回答が表示される。図4は練習用の10問を終了した画面である。右下のボタン「コピー」を押すと、これらの情報がコンピューターのクリップボードにコピーされる（コンピューターに一時的に記憶される）。教員はこのデータを電子メールなどで受験者から集め、Excelで作成された集計フォームに取り込むことが可能である。

紙の試験の入力に慣れた筆者の場合であっても、従来の「鰯テスト」の回答用紙50枚を集計フォームに取り込むのに1時間程度必要であるが、新しい機能を使えば集計の手間を大きく省くことができる上、入力ミスが起こらない。紙で実施する場合は、学生が回答を飛ばしたり、2か所に印をつけたり、尾高型のような想定外の場所に印をつけるなどの問題もあった。入力作業中に特に時間を要するのは、このような想定外の回答への対応であるが、Web版の利用によりこれらの問題の発生を抑える効果が期待できる。

3 聞き比べによるアクセント弁別能力測定ツール

3.1 選択肢音声

出題音声は鰯テストと同一で女性声優による録音である。これに対しアクセント弁別能力測定ツールでは選択肢用の音声として、考えられるすべてのアクセント型で出題語を筆者（男

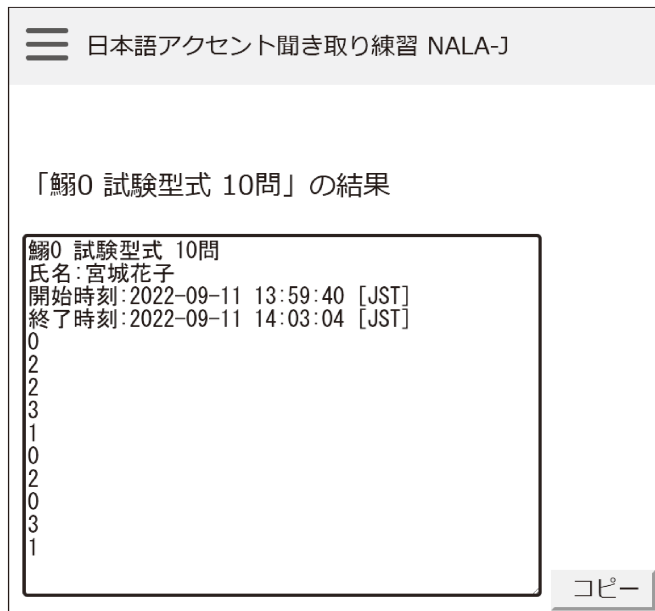


図4 結果画面

性) の声で録音した。3 拍語は 0 型、1 型、2 型の 3 種類を、4 拍語は 0 型から 3 型の 4 種類を、5 拍語は 0 型から 4 型の 5 種類を準備した。受験者が選択肢ボタン「0 型」「1 型」「2 型」などを押すと、NHK 式のアクセント記号が表示されるとともに、該当するアクセント型で発音した音声再生される (図 3)。受験者はこれらの音声の中から、ボタン「聞く」によって再生される出題音声と同じアクセント型のものを選んで回答する。時間制限はなく、受験者は出題音声と選択肢音声を何度でも聞くことができる。選択肢ボタンを押した時に選択肢音声再生されることのみが追加機能であり、それ以外は Web 版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」と同一である。

3.2 発音できないアクセント型

長音、促音、撥音は直前の拍と一体となって音節をなし、アクセント核を持つことはない。これらの直後に急なピッチの下がり目があったと感じた場合は、これらに先行する拍にアクセント核があったと扱うのが一般的である。選択肢が長音、促音、撥音の場合は、指定通りのアクセント型で発音することが不可能であるため、選択肢音声の録音はない。このような選択肢をクリックした場合は録音音声の代わりに「ピーン」という短いエラー音が流れる設計とした。

4 聴取実験の実施概要

4.1 被験者

前述の2つのテストを使った聴取実験を2022年6月から7月にかけて仙台市内の大学において実施した。初めに聞き比べによるアクセント弁別能力測定を行い、次にWeb版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」を実施した。聴取実験には日本語を母語とする18歳から29歳の女性49人の協力があった。最初にクラブ活動を通して集まった学生14人が7回に分けて聴取実験に参加した。次に学内の掲示によって集まった学生35人が9回に分けて参加した。49人のうち4人は回答方法を誤解していたことが調査後に判明したため除外し、残る45人について結果を報告する。

45人の出身地を県別に集計した結果を表1に示す。出身地は高校卒業までに居住した地域とした。一部の学生は複数県での居住歴を持っていたが、主に5歳から10歳の居住地と両親の出身地をもとに出身県を判定した。

受験者に日本語のアクセント記号（または番号表示）についての理解度を調査用紙の上で尋ねたところ、「おおむね理解できる」が8人、「何回か見たがあまり理解できない」が11人、「じっくり見たことがない」が26人という回答であった。「箸と橋と端など、アクセントの違いが話題に出た時のことを教えてください」という質問には40人が「口頭で話題について行ける」を選び、5人が「あまり話について行けない」と回答した。あまりついて行けないと回答した学生の出身県は宮城3人、福島2人で、特別な傾向は見られなかった。

4.2 聞き比べによるアクセント弁別能力測定

聴取実験は大学の設置しているデスクトップ型パソコンまたは個人のノートパソコンを使い、大学で実施した。参加者はヘッドフォンを使って音声を聞いた。実験の初めに、これがアクセントの聞き取りテストであることと、日本語のアクセントは急なピッチの下がり目があるかを決まることを説明した。図5にアクセントに関する説明画面を示す。「まど」「めがね」などの文字をクリックすると録音音声を聞くことができる。実験の参加者にはこの画面を使って音量調整をさせた。

次に聴取実験の手順を口頭及びコンピューター上で示した。図6にテスト手順の説明画面を示す。説明が分かった学生から10問の練習問題をさせ、回答データを電子メール、USBメ

表1 被験者45人の出身県

宮城	福島	岩手	山形	秋田	青森	茨城	栃木
22人	7人	6人	3人	3人	2人	1人	1人

☰ 日本語アクセント聞き取り練習 NALA-J

日本語のアクセントは、急なピッチの下がり目がどこにあるかで決まります。

「まど」「めがね」「毎日」は、第1拍から第2拍にかけてピッチが大きく下がります。

ま\ど め\がね ま\いにち

「七つ」「世の中」「お父さん」は、第2拍から第3拍にかけてピッチが大きく下がります。

なな\つ よの\なか おと\うさん

「いす」「仕事」「テーブル」は、急なピッチの下がり目がありません。

いす― しごと― テーブル―

音量調整をしてから、[次のページ](#)へ進みましょう。

図5 アクセントに関する説明画面

☰ 日本語アクセント聞き取り練習 NALA-J

聞き取りテストの練習を始めましょう。次の手順で進めます。

- 1 ボタン「聞く」を押して、出題音声を聞きます。
- 2 選択肢ボタン「1型」「2型」などを押して音声を聞き、出題音声と同じアクセントのものを選びます。
 - ・出題音声と選択肢の音声は、何回でも聞くことができます。
 - ・短い警告音の流れる選択肢があります。これは発音できないアクセント型のため、録音がありません。
- 3 正しい答えが分かったら、ボタン「決定」を押し、次の問題に進みます。
 - ・自分の思い浮かべる音と出題音声異なる場合があります。必ず出題音声を聞いて回答しましょう。

[前のページへ戻る](#) [練習を始める](#)

図6 テスト手順の説明画面

モリー、学内 LAN などの方法で回収した。回答とデータ回収の練習がすべて終わってから本番の聴取実験を実施した。

4.3 従来型のアクセント聞き取りテスト

音声を聞き比べて同じアクセント型の選択肢を回答するテストを終了した直後に、Web版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」（鱒1）を実施した。プログラムは前述の聞き比べによるアクセント弁別能力測定ツールと同様であるが、選択肢ボタン「0型」「1型」「2型」などを押した際に何も音声が流れない点だけが異なる。

最初にアクセントについて口頭で簡単に説明をした。「急なピッチの下がり目があったときに、その直前に斜線を入れる」「声が低くなったと感じた時に、その直前に斜線を入れる」などと説明し、いくつか例を挙げた。その後、図5の説明画面を見せ、それぞれ個人のペースで10問の練習問題を始めさせた。練習の直後に答えを示し、長音と促音と撥音にアクセント核を感じた場合はその1つ前に印をつけることを説明した上で72問の聞き取りテストを開始した。

5 聴取実験の結果と考察

5.1 聞き比べによるアクセント弁別能力測定の結果

正答率の分布は92%から100%、正答率の平均は99%であった。表2に正答数別の人数を示す。受験者45人の62%に当たる28人が72問すべてを正解した。受験者の89%である40人が72問中70問以上を正解した。筆者は学内で学生と会話する際にアクセントに関する違和感をあまり感じる事がなく、実験結果は聴覚印象とも合致する。

アンケート調査「箸と橋と端など、アクセントの違いが話題に出た時のことを教えてください」に対して「あまり話について行けない」と回答した5人の正答率は100%、100%、99%、99%、96%で、特別な傾向は見られなかった。

5.2 回答間違いの原因

聴取実験後に受験者数人に聞き取りをした。72問の中で誤答が2つあった学生に、これらについて出題音声と学生が選択した音声を口頭で再現したところ、どちらも「絶対違う」とし、そのような答えを選択する訳がないと答えた。ボタンの押し間違いがあったと思われる。また72問のうち6問が誤答であった学生に聞き取りをしたところ、「愛してる？」の正解で

表2 正答数別の人数（音声付の選択肢、72問、受験者45人）

72問 (100%)	71問 (99%)	70問 (97%)	69問 (96%)	68問 (94%)	67問 (93%)	66問 (92%)	0-65問 (0-90%)
28人	8人	4人	1人	2人	0人	2人	0人

ある1型アクセントと、学生が回答した4型アクセントとを「ほぼ同じ」だと答えた。「親子?」も正解である1型と学生が回答した2型とを「ほぼ同じ」だと答えた。大人数で調査を実施すれば、このように違いをはっきり感じないアクセント型について、出身地域別の特徴を見いだせる可能性が示唆された。

5.3 出題音声を聞かずに回答した例

聞き比べによるアクセント弁別能力測定ツールは、ボタン「聞く」を押して出題音声を聞き同じアクセント型であるヒント音声を選ぶものであるが、学生の1人が出題音声を聞かずに自分のアクセント型を頼りに回答していることが分かった。このことは13回実施した聴取実験のうち、2回目の実験に参加した学生への実験後の聞き取りにより判明した。この受験者の正答率は78%であった。第1回と第2回で有効な回答と扱った他の学生は正答率が100%または99%であり、指示通り回答できたものと思われる。回答方法の誤解が起こらないよう、第3回以降の実験では回答手順について特に丁寧に説明するとともに、受験者が練習画面を回答する際、ボタン「聞く」を押していることを筆者が見て回り確認をした。このような間違いが起こらないよう、今後はボタン「聞く」を押した後にだけ選択肢ボタンが有効となるよう設計を変更することとした。

5.4 発音できないアクセント型の選択

長音、促音、撥音は直前の拍と一体となって音節をなし、アクセント核を持たない。聴取実験では、このようなアクセント型を示す選択肢をクリックした場合、録音音声の代わりに「ピーン」という短いエラー音が鳴るが、聴取実験に参加した学生のうち2人がこれを正答の合図だと思い選択したであろうことが分かった。この2人の正答率が極端に低かったため誤答傾向を調べたところ、エラー音を含まない部分をほぼすべて正答する一方、エラー音の鳴る部分を連続して選択していることが分かったため、この2人の回答は集計に加えないこととした。今後はこのような正解の可能性のない箇所に選択肢ボタンを表示しないよう設計を変更する予定である。

5.5 アクセント記号に関する知識による影響

アクセント型に関する知識のある学生が、モデル音声を聞き比べる以外の方法で回答し、結果的に誤答を回答している例があった。1人の学生は大学の授業で日本語のアクセントについて学んでおり、その方法は低い音になった場合にその第1拍の上部に「○」印をつけるというものであった。つまり、アクセント核の直後の拍にマークをする方式であった。今回の調査の1か月後に行った同様の調査の冒頭で、1型アクセントである「トマト」を2型と答えたこ

とに関して尋ねたところ、授業で勉強した通り第2拍の「マ」をクリックしたとのことであった。72問のうちの冒頭でもあり、音声をよく確認できていなかったようでもあった。

このほかにもアクセント記号につられてすべての音声を聞かずに回答し、結果的に誤答である例が見られた。選択肢ボタン「0型」「1型」やアクセント記号の表示はアクセント記号を学ぶ者には有用であるが、弁別能力の測定にはむしろ支障があることが分かった。純粹に聞き取り能力を診断するための調査には、選択肢音声をアクセント型によらずランダムに並べ、アクセント型の名称やアクセント記号を表示しないほうが、むしろ正確な結果が得られるであろうことが分かった。

5.6 「東京語アクセントの聞き取りテスト」Web版の結果

聞き比べによるアクセント弁別能力測定の実施直後に、出題音声を聞いてアクセント記号で回答する聴取実験を実施した。選択肢ボタンを押しても音声が流れないため難度が上がる。直前の実験とまったく同じ「鰯テスト1」の問題72問を出題したが、45人の正答率は17%から99%で、正答率の平均は62%にとどまった。表3に正答率別の人数を示す。

アクセント記号（または番号）についての理解度アンケートに対して「おおむね理解できる」と答えた8人の正答率の平均は60%、「何回か見たがあまり理解できない」と答えた11人は55%、「じっくり見たことがない」と答えた26人は66%であり、相関は見られなかった($r=0.01$)。出身県別の正答率の特徴も特に見られなかった。

5.7 所要時間

第1問の開始から第72問の終了までに要した時間は、聞き比べによるアクセント弁別能力測定は7分から20分程度で、平均約12分であった。この中に1人だけ27分かけた学生がいた。Web版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」に関しては7分から25分程度で、平均約15分であった。従来版のテストはCD音声が説明と練習を含めて12分間であり、Web化によって実施時間の短縮につながることはなかった。紙の試験と異なり、出題音声を何度でも聞くことができるよう設定したことが原因だと思われる。しかしながら、Web版の試験は授業時間を使わず、自宅で受験するように指示することが可能である。また感染症が流行した際などに遠隔で実施できるなど、利用方法の選択肢が広がる。

表3 正答率別の人数（音声なしの選択肢、72問、受験者45人）

100%	90-99%	80-89%	70-79%	60-69%	50-59%	40-49%	30-39%	0-29%
0人 (0%)	4人 (9%)	6人 (13%)	8人 (18%)	7人 (16%)	6人 (16%)	5人 (11%)	7人 (16%)	2人 (4%)

6 まとめ

2021年にWeb公開した日本語アクセント練習ツール NALA-Jの機能を一部利用して、Web版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」を作成した。紙の回答用紙を使う従来版に比べて、回答を集計フォームに取り込む作業が格段に容易となった。入力ミスが無くなり、未回答や重複回答などの問題も防げるようになった。試験時間の短縮にはつながらなかったが、自宅で個別に受験させることにより授業時間を削る必要がなくなった。新たな問題を作成したり、出題数を変更することも容易に可能となった。

この試験プログラムを修正して、アクセント記号に関する知識に左右されずにアクセント弁別能力を測定するツールを開発した。考えられるすべてのアクセント型で出題語を録音し、出題音声と同じアクセント型で発音された音声を選ばせる設計である。今回仙台市で実施した聴取実験では、協力者45人の正答率の平均は99%と高かった。聴取実験の直後に実施したWeb版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」では、まったく同じ72問の正答率の平均が62%と低かった。従来の研究では紙の回答用紙を用いて後者のようなテストを実施し、日本語学習者の母語別の誤答傾向を分析してきた。統制群の正答率が90%に満たない試験を用いた誤答傾向の分析は困難であったが、今後は聞き比べによるアクセント弁別能力測定ツールを使い、より正確な調査が可能となった。

今回開発した聞き比べによるアクセント弁別能力測定ツールでは、「1型」「2型」などの選択肢ボタンを押すと該当する選択肢音声再生され、アクセント記号が表示される。アクセントを学ぶ日本語学習者には良い教材となるが、純粹にアクセント弁別能力を測定する目的で利用するにはボタン名やアクセント記号の表示が回答に影響を与えることが分かった。今後はアクセント型を示すボタン名やアクセント記号を表示しない単純な測定ツールを作成し、20年前に大まかな傾向までしか調べられなかったアクセント弁別能力に関する母語別の特徴を解き明かしたい。

参考文献

- 鮎澤孝子 (1997) 『『東京語アクセントの聞き取りテスト』について』『21世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」研究班3「音声言語の韻律特徴に関する実験的研究」平成8年度研究報告書, 179-204
- 鮎澤孝子 (1998) 「日本語学習者にとっての東京語アクセント」『月刊言語』27(1), 70-75
- 鮎澤孝子・海野多枝・西沼行博・小高京子 (1999) 「東京外国語大学における日本語学習者の東京語アクセント習得」『日本研究教育年報 (1997・1998年度版)』43-54
- 鮎澤孝子・小高京子 (1998) 『『東京語アクセント聞き取りテスト』21言語グループの母語別・成績群別正答率』『国際社会における日本語についての総合的研究研究論文集1』新プロ「日本語」総括班 57-71

Web版の「東京語アクセントの聞き取りテスト」および聞き比べによるアクセント弁別能力測定ツールの開発（河津 基）

- 鮎澤孝子・西沼行博・河津基（2000）「アクセント習得の縦断研究—3年半の調査結果—」『第14回日本音声学会全国大会予稿集』117-182
- 鮎澤孝子・許舜貞・河津基（2003）「『東京語アクセントの聞き取りテスト』（鯛テスト）とテスト結果」『特定領域研究「高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」研究成果報告書』平成14年度計画研究，メディア教育開発センター，33-38
- NHK放送文化研究所（2016）『NHK日本語アクセント新辞典』NHK出版
- 河津基（2012）「Web版の日本語アクセント聞き取り練習プログラムNALA-J」『秋田大学国際交流センター紀要』1，65-71
- 河津基（2021）「スマートフォンで動作する日本語アクセント聞き取り練習ツールNALA-J」『宮城学院女子大学研究論文集』133，59-70
- 河津基・鮎澤孝子・許舜貞（2003）「東京語アクセント聴取テスト用CDの開発」『ニュースレター高等教育改革とマルチメディア』7，メディア教育開発センター特定領域研究120事務局，43-44
- 河津基・岩田之男・鮎澤孝子・新田洋子（1999）「CD-ROM版『東京語アクセントの聞き取りテスト』について」新プロ「日本語」ESOPチーム平成10年度研究成果報告書，国立国語研究所，27-44
- 杉藤美代子（1972）「“おそ下り”考—動態測定による日本語アクセントの研究—」『大阪樟蔭女子大学論集』10，66-94
- 西沼行博（1997）「アメリカ人・フランス人日本語学習者のアクセント聞き取り—母語干渉による知覚のゆがみ—」『21世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」研究班3平成8年度研究報告書5-12
- Nishinuma, Y. (1994) "How do the French perceive tonal accent in Japanese? Experimental evidence." Proceedings of ICSLP 94, 1739-1742.

Development of the web-based “Tokyo Japanese Accent Listening Test” and a tool to measure accent detection accuracy by comparison of recorded utterances

Motoi KAWATSU

A web-based version of “The Tokyo Japanese Accent Listening Test” has been developed. The new test has significantly eased the data input process after every test session. It also brought such benefits as eliminating typing errors and preventing students from skipping answers and marking duplicated answers. Although the new test does not have the function of limiting answering time, you can save your class time by administering the test to be taken at home.

A tool to measure accent detection accuracy by comparison of recorded utterances has also been developed. This tool provides model recordings of “The Tokyo Japanese Accent Listening Test” and the recordings of utterances pronounced in every possible accent as answer choices. Students listen to the model recording, compare the answer choice recordings, and choose the recording which has the same accent as the model recording.

The average score of the 45 students on the accent detection accuracy measurement was 99%, while the average score of the same students on the web-based version of “The Tokyo Japanese Accent Listening Test” was 62%. It is not easy to find the tendencies of accent detection accuracy by an experiment in which the control group’s average score is less than 90%. The new tool showed an extremely high score for the control group. It would be most constructive to undertake experiments using the new tool and discover clearer tendencies of accent detection accuracy according to each of the Japanese language learners’ native languages.